

醫通云、邇年有種痘之說、始自江左、達於燕齊、近則遍行南北、詳究其源云、自玄女降乩之方、金鑑云、古有種痘一法、起自江右、達於京畿、究其所云、源云、自宋真宗時、峨眉山有神人、出爲丞相王旦之子、種痘而愈、遂傳於世、弋陽縣志云、黃晏曙五十三郡人、徐成吉五十五郡人、得十全神痘法、以棉絮取痘漿之佳者、送入鼻內、及愈有瘢如真、往々靈驗、遠近皆聞其風焉、方象瑛種痘小引云、江楚間、多種神痘、相傳、昔有道士憫痘症殺人、禮峨眉山四十九日、夢授某童子仙苗、翌日痘出、李仁山蘇州人、享保中來寓于崎館云、種痘之法、出自神授、前有徽商施姓者、泛海至一山、遇天后顯靈、授以此法、按種痘之源、諸說渺茫如此、蓋其起自明季無疑矣、聞斯邦房州濱海一村、有數百年前行種痘法多用乾苗、乃先於彼土而知用此亦奇矣、夫痘之順逆、係于受毒之輕重、不由種與不種、然不種而逆、人必委之於天、種而逆、必恨種者、不若任其自然也、有人問痘可種否者予則常以此爲答、

〔善那氏頌德之記〕日本種痘の沿革

我邦には、誰人の創めしや、數百年前より、安房の國海邊の村落に、一種の種痘法行はれたり、其は天然痘の痂を探りて、人に種ゑしと言ふ、其後延享年間、支那蘇州又は杭州と、詳ならずの李仁山と云へる人、長崎に來り、支那の種痘法を傳へたり、此法も天然痘の痂を粉末にして、鼻孔に吹き入るゝ者なり、次で寶曆二年、支那より、醫宗金鑑といへる大部の醫書、我邦に傳はり、此書中に、精しく種痘の事を載せたれば、安永七年、其種痘篇を抜萃して、種痘心法と題し出版して世に公にせしより、種痘の事は、これより漸次に世に行はるゝことなり、文化文政の頃より、天保安政年間に至りて、此法大に行はれ、種痘家を以て名を成せし者も少からず、肥前大村の人長與俊達、芳陵英伯、筑前秋月の人緒方春朔、常陸水戸の人本間玄調、上總佐貫の人井上宗端、木下川の庄屋次郎兵衛、武州忍の人河津隆碩、江戸の人桑田玄真及び桑田立齋等、孰れも皆種痘家を以て高名なりき、次に寛政五年西洋種痘法の我邦に入りしや、和蘭人某役人高木氏の望に